

第 9 回

『寺社勢力の中世』 ～無縁・有縁・移民～ 伊藤正敏、ちくま新書、2008年 (下)

中世の主役は「寺社」だ！

今回は『寺社勢力の中世～無縁・有縁・移民』の紹介の3回目、最終回になります。

中世とは、「寺社」が強大な「勢力」として力を振るう「寺社勢力」の時代だ、ということ。また、寺社勢力の経済的基盤や軍事力について紹介してきました。

「御用寺社」の設立

最終回は、少し視点を変えたいと思います。中世社会において「寺社勢力」は強大な権力を持ち、朝廷や武士にとっても脅威でした。しかし、延暦寺や興福寺などの寺社勢力にやられっぱなしだったわけではありません。様々な抵抗もしましたし、知恵も絞って対抗策を練りました。そのことを、見ていきましょう。

筆者は『寺社勢力の中世～無縁・有縁・移民』で、次のように書いています。

院政時代は信仰が狂想曲にまで高まった時代で、鳥羽・後白河・後鳥羽院の3代90年間は、多額の経費を要する院の寺社参詣が繰り返された。熊野詣は約90回も行われ、独裁者の院が毎年2週間も京を留守にし、平気で政治的空白を作った。承久の乱のわずか3ヶ月前にも、後鳥羽院は熊野詣で行

っている。

寺社に対する荘園寄進は実に気前の良いもので、そのため勢力の拡大に歯止めがかからない。強訴が年中行事のように繰り返された背景には、宗教に対する異常とも言える帰依と大甘の姿勢があった。寺社側の心理操作が巧妙で、院・貴族よりも一枚上手だ。

上記の文書の中に「熊野詣」が約90回も行われたとありますが、熊野以外ではどこに行ったのでしょうか？

そう、「高野詣」でしたね。

この熊野詣と高野詣を白河・鳥羽・後白河の3代の上皇プラス後鳥羽上皇は、それぞれどのくらい行ったのでしょうか？また、この4人の上皇の中で最も多いのは誰だと思いますか？

それぞれの詣でた回数は、白河上皇が9回、鳥羽上皇が21回、後白河上皇がなんと34回、後鳥羽上皇が28回でした。ですから、最多なのは、後白河上皇でした。

当然ですが、上皇一人で行くわけではないので、莫大な費用がかかりました。（なお、文中の「毎年2週間」とありますが、熊野詣の場合は片道で約2週間かかると思いますから「毎年1ヶ月間」くらいが正しいと思います。

さて、院政期において、上皇や天皇は、意のままにならない寺社勢力に困り果て対策を取りました。つまり、意のままになる寺社＝「御用寺社」を作るようになったのです。

どんな寺社がありましたか？

そう、「六勝寺」と呼ばれる寺社ですね。

では、白河天皇が造立した寺院、子の堀河天皇が造立した寺院の名前を教えてください。

白河天皇が法勝寺、堀河天皇が尊勝寺でした。



法勝寺九重の塔
の復元模型
（京都市平安京
創生館）

ところで、上記の写真にある法勝寺九重の塔は、京都のどのあたりに建てられたのか知っていますか？

そう、京都岡崎にある京都市立動物園の敷地にありました。現在は観覧車が設置されています。

ちなみに、六勝寺または法住寺殿の中核の**三十三間堂**などには大量の荘園が寄進されました。上皇は最大の荘園領主でしたが、荘園の所有名義は皆これらの御用寺社にしています。これらの寺社に実権はないので安心ですね。新日吉（いまびえ）社・新熊野（いまくまの）社などもこの頃に設立されました。これらは信仰のシンボルを持ち得ず、創立者以外の人々を引き付ける魅力に欠けていたため、建立主体の没落とともに消えてなくなりました。なお仁和寺・東寺は御用寺社に近い状態であり続けました。

従って、**古代の寺院は完全な鎮護国家のための「御用寺院」**であったのに、**中世の寺院は「意のままにならない・恐怖の対象の寺院」**に変質し、**近世の寺院は「御用寺院」に戻る**、というのが日本の寺社の歴史ということになります。

鎌倉時代の「御用寺社」

さて、今度は鎌倉時代です。この時代には「御用寺社」はどうなっていたのでしょうか？
筆者は以下のように述べています。

鎌倉幕府はより強力な新タイプの御用寺院の創設を試みた。禅僧と律僧の起用である。

両者とも、鎌倉時代に中国から新たに渡来した宗派で、塔頭（タッチュウ）・典座（テンゾ）・法堂（ハットウ）などの中国語を、そのまま使うエキゾチックな存在だ。南都焼き討ち後、東大寺は幕府の協力で禅宗様で再建され、宋人陳和卿が活躍した。蒙古襲来というと日蓮が有名だが、彼は当時無名に近かった。律宗の西大寺叡尊は幕府・朝廷の厚い帰依を受け、大僧正という僧侶として最高の地位を極め、興正（こうしょう）菩薩とも呼ばれた。「神風」は神々に命じて叡尊が吹かせたものだと、当時朝幕に信じられた。叡尊こそ戦功第一なのだ。

そして、宗教政界で最高権力を握った叡尊は、古代の（A）、近世の（B）とならぶ三大政僧だ、といいます。では、（A）（B）の中に入る人物は誰でしょうか？

答えは、（A）は道鏡、（B）は天海、でした。（なお、文中の「禅宗様で再建」とありますが、「大仏様で再建」の間違いだと思います。）

あなたは叡尊を覚えていましたか？ 叡尊といえば、鎌倉に建てた有名な寺院があります。その寺は何でしょうか？

極楽寺でしたね。江ノ電の極楽寺駅から歩いてすぐにあります。



極楽寺の庭

また、叡尊の弟子に忍性（にんせい）がいます。彼は奈良の地に病人の救済施設を建て、施療や慈善に尽くしたことで有名です。この施設を何と呼びますか？

そう、北山十八間戸と言いました。

鎌倉時代の禅僧といえば、南宋から来日した有名な人がいますよね。鎌倉に建長寺を開山した僧侶な

らびに円覚寺を開山した僧侶は誰でしたっけ？

答えは、建長寺が蘭溪道隆、円覚寺は無学祖元でした。



円覚寺舍利殿



建長寺の山門

ところで、鎌倉幕府は、どうやって強大な寺社勢力に対抗していったのでしょうか？

筆者によれば、幕府は寺社間の紛争が起きた場合、比叡山延暦寺と園城寺または石清水八幡宮が争った場合は後者を、興福寺と石清水八幡宮または東大寺が争った場合は必ず後者を最優先した、そうです。こういうのを「毒をもって毒を制す」と言いますね。

南都焼き討ちの後、源頼朝は東大寺の復興を支援しましたよね。南大門や運慶らの仏像の傑作は、この時に造られました。それに対して、東大寺の仇敵である興福寺の復興には、幕府はほとんど協力していません。現在でも往時からみれば堂塔は少ないですね。

また、代々の鶴岡八幡宮別当には園城寺の僧侶が任命されました。さらに、北条氏からはなんと16名が園城寺に入り、そのうち顕弁・房朝は園城寺の長官につきました。

そして、園城寺は比叡山（と東大寺）が独占する戒壇とは別に、独自の園城寺戒壇を設立しようと計画し、幕府も軍を派遣してその実現を援助します。

なぜかと言えば、戒壇で受戒を行うたびに多額の収入（戒料）が得られたからです。その「戒壇の利権」が問題の根底にあったのです。ただ残念ながら、その企ては失敗しました。

さらに鎌倉幕府は、本格的に南都北嶺対策に乗り出します。1236年、石清水八幡宮と興福寺の間で、大和・山城国境の荘園の奪い合いが起こります。この問題の解決に困った朝廷は幕府に救援を求めます。

幕府は畿内近国の御家人を集め、南都への道路を封鎖します。武力を示して興福寺に圧力を掛け、それまで全国で唯一、守護・地頭をおいてなかった大和に、守護を設置し興福寺領荘園に地頭を置く構えを見せて威嚇しました。結局失敗しますが・・・。

室町時代の「御用寺社」

では、**室町幕府**の場合はどうだったでしょうか？

なんと言っても、「**五山・十刹の制**」が整備されていきましたよね。**南宋の官寺の制にならった「五山・十刹の制」**は3代将軍足利義満の時代にほぼ完成を見ます。要は**禅宗寺院を序列化・ブランド化し、寺院を幕府の統制下に置いた**わけです。ですから、これらの寺院は古代の「官寺」と言って良いもので、荘園からの年貢を金融業に用いて利益を上げており、そこからの官銭は幕府にとって大きな収益源ともなりました。

五山の禅僧になったのは中国からの渡来僧や中国帰りの留学僧でした。彼らは海外の事情に通じていたため、中国文化（例えば、水墨画や建築・庭園様式など）を伝えました。

ところで、**京都五山や鎌倉五山に該当する寺院名を教えてください。**

京都五山は、天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺の5寺でした。

鎌倉五山は、建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺の5寺でした。

では、**五山の上に置かれた別格寺院の名は何ですか？**

南禅寺でしたね。

次に、南禅寺に置かれた初代僧録は誰でしたか？

答えは、春屋妙葩（しゅんおくみょうは）です。

五山・十刹に対して、大徳寺や妙心寺といった寺は「**林下**」といって区別されます。では、**大徳寺の**禅僧で、自ら戒律を破ることで、官寺の腐敗や墮落を批判したとされる人物は誰でしょう？ 「**とんちの名人**」というのがヒントです。

そう、一休宗純ですね。アニメの「一休さん」のモデルで、日本人で一休さんを知らない人はいないのではないのでしょうか(^_^)



南禅寺山門

足利義満の頃には、宋学の研究や漢詩文の創作などが盛んに行われ、**五山文学**は最盛期を迎えました。ところで、**この頃に活躍した僧侶にどんな人がいましたか？**

そうですね。絶海中津や義堂周信がいました。彼らは幕府の政治・外交顧問としても活躍しましたよ。

上記のように、**室町幕府3代将軍足利義満の時には、禅寺・禅僧を中心とした文化力・外交力で「寺社勢力」に対抗してきました。**足利義満は経済力も大きくしようと企図します。

例えば、足利義満は1385年に京都市政権を把握することに成功します。それまでは、「洛中」だけ

だった幕府の権威が「洛中」「洛外」にまで拡大されたのです。同じ時期に北野社も幕府の傘下に入りました。また四条道場金蓮寺も、幕府と**佐々木道誉**の圧力で、延暦寺の末寺を離れて独立を果たします。ようやく上下の信仰を集めた祇園・北野社の神威を、幕府が傘下におさめることに成功したのです。

上記の佐々木道誉は極端な豪華さやぜいたくさを特徴とする「〇〇〇大名」の代表者である、と言えます。「〇〇〇」に入る言葉は何でしょう？

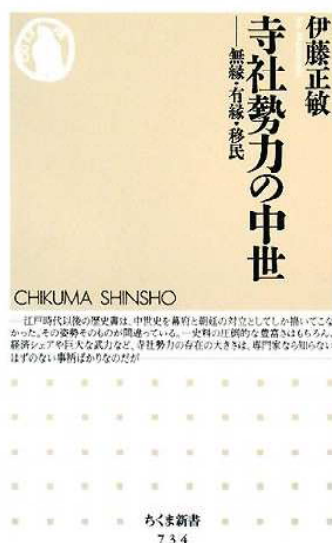
「バサラ（婆娑羅）」でしたね。

足利義満は1393年には、諸寺諸社の神人が持っていた免税特権をことごとく否定します。室町幕府は洛中洛外の土倉・酒屋への課税を開始し、これが**土倉役・酒屋役**として室町幕府の主な収入源となっています。土倉役・酒屋役は年間600貫、祇園会20回分に相当する金額だったそうです。

でも、幕府の黄金時代は、義満の時代から足利義教の時代の約60年間で、あっけなく終わってしまいます。

1441年に、第6代将軍足利義教が暗殺されたのは何という事件でしょうか？ また、足利義教を殺害した有力守護大名は誰でしたっけ？

答えは、「**嘉吉の変**」で、殺害したのは**赤松満祐**でした。足利義教と言えば、クジで将軍になったので「くじ引き将軍」と呼ばれましたね。また、「犬死将軍」とも言われました。



さて、3回にわたり伊藤正敏氏の『寺社勢力の中世～無縁・有縁・移民』から、様々なことを学んできました。ここではいちいち繰り返しません、何回も「目から鱗が落ちる」ことがありました。そこで、最後にもうひとつ「目から鱗が落ちる」ことを紹介して終わります。読者のあなたも、きっと同じ思いだと思いますが・・・。

江戸時代の高野山行人は、6人の組頭のうち2人が半年の任期で江戸に参勤交代する。高野山は10万石格の大名なのだ。学侶方は行人方とは別に参勤交代した。正月には江戸城に登城して柳の間に詰める。柳の間には織田・松浦・伊東・津軽などの諸大名が詰める。井伊・会津松平に次ぎ、阿部・稲葉よりは上格である。高野山領は周辺を御三家の紀州藩領に囲まれているが、高野山はその支配を受けず、独立して領内支配を行った。

参勤交代とは、武士が将軍に拝謁して主従関係を確認する意味を持つ武家役である。「将軍個人」との人格的主従関係ではなく、「将軍家というお家」との制度的主従関係だ。高野山の武家としての性格がわずかに残る。だが実際は秀吉の刀狩りにより武器を没収されて武力を失っている。幕末の百姓一揆や地方騒動の際には、紀州藩兵を呼び入れて鎮圧してもらった。中世の全盛を失って、かろうじて生き残った行人と高野聖の姿である。

どうでしたか。今回もお読みいただき、ありがとうございます。